

史跡妙心寺境内・平安京跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一六―一四

史跡妙心寺境内・平安京跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

史跡妙心寺境内・平安京跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、配水管布設工事に伴う史跡妙心寺境内・平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

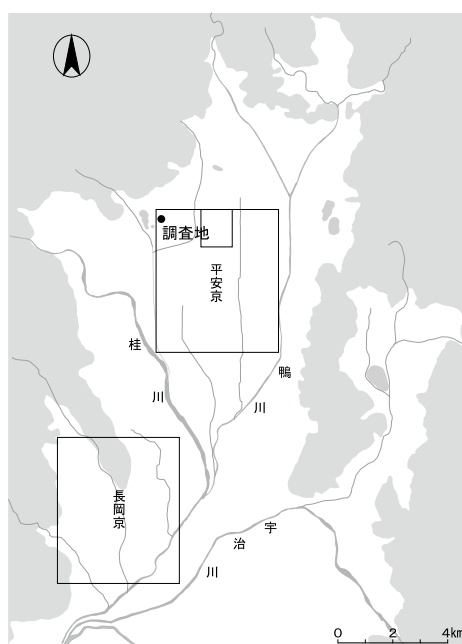
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成29年5月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡妙心寺境内・平安京跡
- 2 調査所在地 京都市右京区谷口園町～花園寺ノ前町 地内（妙心寺境内）
- 3 委 託 者 京都市公営企業管理者上下水道局長 山添洋司
- 4 調査期間 2016年9月5日～2016年12月16日
- 5 調査面積 70㎡
- 6 調査担当者 モンペティ恭代
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「衣笠山」・「花園」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 各調査区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 モンペティ恭代
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 15 協力者 調査に際しては、妙心寺の東海元昭氏にご協力を賜りました。記して感謝いたします。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査の経過	1
(2) 遺跡の位置と環境	1
(3) 周辺の調査	6
2. 遺 構	9
(1) 基本層序	9
(2) B区の遺構	10
(3) C区の遺構	11
(4) D区の遺構	12
(5) H区の遺構	14
(6) J区の遺構	14
3. 遺 物	17
(1) 遺物の概要	17
(2) 土器類	17
(3) 瓦類	18
(4) その他の遺物	18
4. ま と め	19

図 版 目 次

図版1	遺構	1	B区全景（北から）
		2	C区東半全景（北から）
		3	C区西半全景（北から）
図版2	遺構	1	D区全景（北から）
		2	D区礫敷2（南から）
		3	D区土器溜7（北から）
図版3	遺構	1	H区全景（北から）
		2	H区南東部（南から）
		3	J区全景（北から）

挿 図 目 次

図1	調査位置図及び周辺の調査位置図（1：2,500）	2
図2	B区調査前全景（南から）	3
図3	C区調査前全景（北から）	3
図4	D区調査前全景（北から）	3
図5	D区作業風景（北から）	3
図6	H区調査前全景（南西から）	3
図7	J区調査前全景（北東から）	3
図8	B区調査区配置図（1：500）	4
図9	C区調査区配置図（1：500）	4
図10	D区調査区配置図（1：500）	5
図11	H区調査区配置図（1：500）	5
図12	J区調査区配置図（1：500）	6
図13	土層模式柱状図	9
図14	B区実測図（1：50）	10
図15	C区実測図（1：50）	11
図16	D区実測図（1：50）	13
図17	H区実測図（1：50）	15
図18	J区実測図（1：50）	16
図19	D区土器溜7出土土器実測図（1：4）	17
図20	D区土器溜7出土土器	18
図21	H区瓦溜1出土軒平瓦拓影及び実測図（1：4）	18
図22	H区瓦溜1出土軒平瓦	18

表 目 次

表1	遺構概要表	10
表2	遺物概要表	17

史跡妙心寺境内・平安京跡

1. 調査経過

(1) 調査の経過

本調査は、高区花園連絡幹線配水管布設（その3）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。本工事では、配水管布設に伴って、数箇所立杭の掘削工事が計画された。これらの地点は、史跡妙心寺境内および平安京跡にあっており、事前の埋蔵文化財調査が必要であった。このため、（公財）京都市埋蔵文化財研究所が事業主より委託を受け、発掘調査を実施する運びとなった。調査では、妙心寺および平安京に関連する遺構・遺物の検出を行い、歴史的変遷を明らかにすることを目的とした。

調査は、2016年9月5日より開始した。調査区は工事による立坑地区名を調査区名とし、5区（北からB区、C区、D区、H区、J区）を設定し、調査は南のJ区から北へ順に行った。車輦などの通行の都合上、C区では調査区を反転して実施した。埋設管の掘形を含め、近代以降の地層（現地表からおよそ0.3～1.0m）は重機を用いて掘削、江戸時代遺構面以下は人力で掘削した。適宜、平面図・断面図など、必要な図面の作成と写真撮影による記録作業を実施した。各区調査では都度、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の臨検を受け、その指示に従った。D区調査では、京都府教育庁指導部文化財保護課の指導も受けた。

調査中の排土は境内に仮置きし、各調査区終了ごとに埋め戻し、現状に復した。石畳は石材業者により、撤去工事と復旧工事を行い、12月16日に現場での作業をすべて終了した。

調査地は、人・自転車・バイク・車両の通行量が多く、保育園もあることから、安全対策に十分注意を要することに加えて、車両交通規制も要した。このため、警備員を随所に配置し、注意喚起の立て看板を4か所に設置、他の工事業者とも綿密に連絡を取り合いながら、寺側の指示に従って作業を進めた。さらに、史跡妙心寺境内の中にあり、周辺も住宅地であることから、調査中の騒音、振動、排土の流出・飛散には十分な対策を施した。

(2) 遺跡の位置と環境

調査地は、京都盆地北西部の山塊縁辺部に形成された北から南に派生する台地（低位段丘）上に位置する。妙心寺境内の標高は、北門付近の一条通が60m台、南門付近の下立売通が48m台で、境内の高低差は約12mと、傾斜が大きい。

妙心寺の伽藍が並ぶ境内中心部は、周囲よりわずかに高く、主要建物はもっとも立地条件の良い尾根筋を選んで建てられたことがわかる。それより西側は緩やかに下がり、西ノ川によって形成された谷地形が寺域の西限となる。東側には宇多川が開析した谷地形がある。特に西岸は台地縁辺部

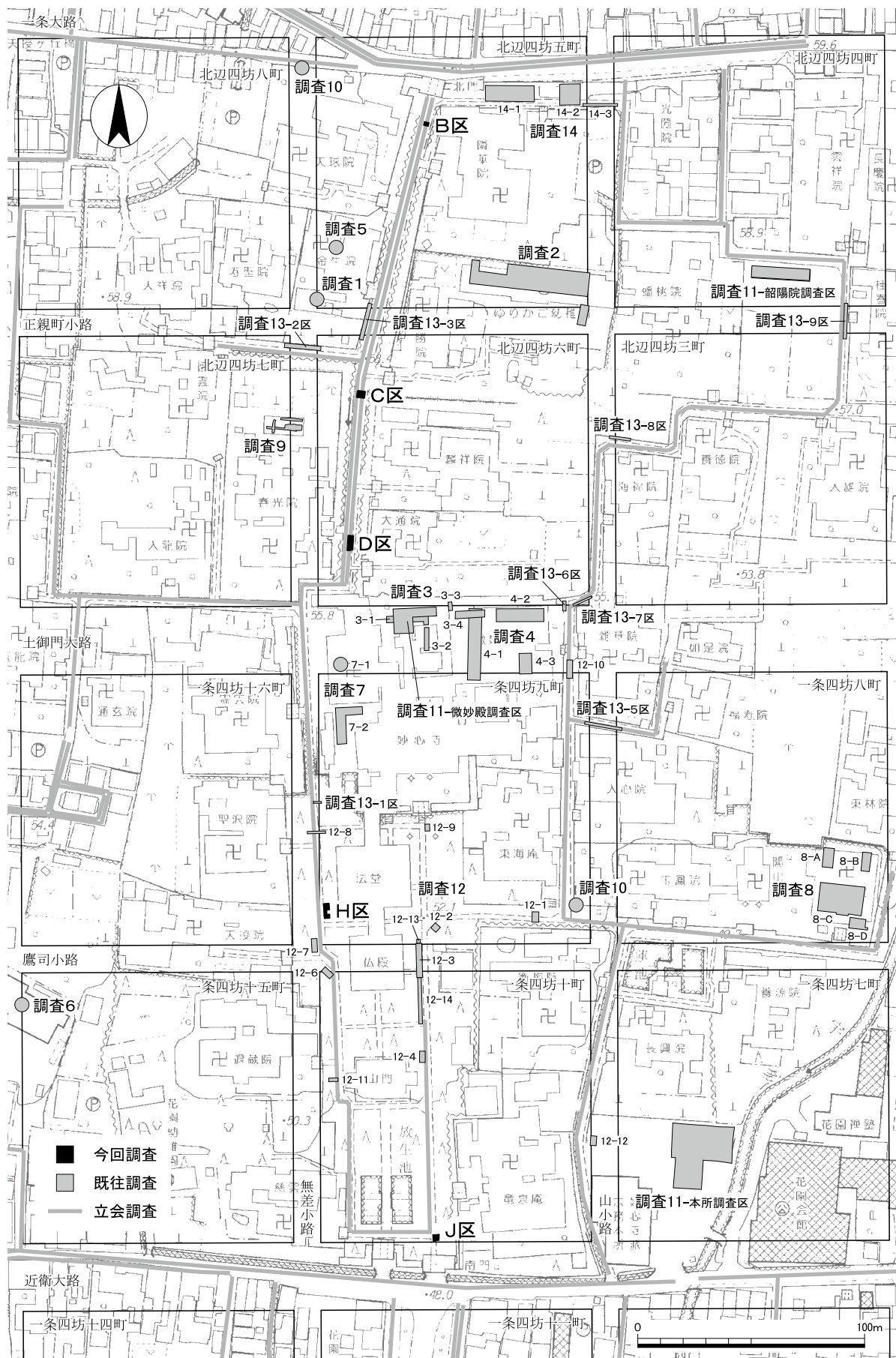


図1 調査位置図及び周辺の調査位置図 (1 : 2,500)

を侵食し、比高差6mほどの高い崖面が形成されており、この宇多川は妙心寺の東辺を限る天然の施設ともなる。

妙心寺境内は平安京右京北西部に該当し、右京北辺四坊の8町と右京一条四坊北半部の8町の合計16町を占めている。北端は平安京の北限である一条大路（現在の一条通）、南端は近衛大路（現在の下立売通）に面し、中心部には無差小路と山小路が南北に通る。伽藍の南北軸は、北で西に2度10分ほど振れている。この方位は、平安京条坊の振れと一致しない。同様に、境内に配置された各塔頭の区画や規模をみても、ほとんどは平安京条坊と一致しない。このことは、妙心寺が寺域を広げ、境内各所に塔頭が置かれた頃には、すでに平安京条坊による土地区画は遺存していな



図2 B区調査前全景（南から）



図3 C区調査前全景（北から）



図4 D区調査前全景（北から）



図5 D区作業風景（北から）



図6 H区調査前全景（南西から）



図7 J区調査前全景（北東から）

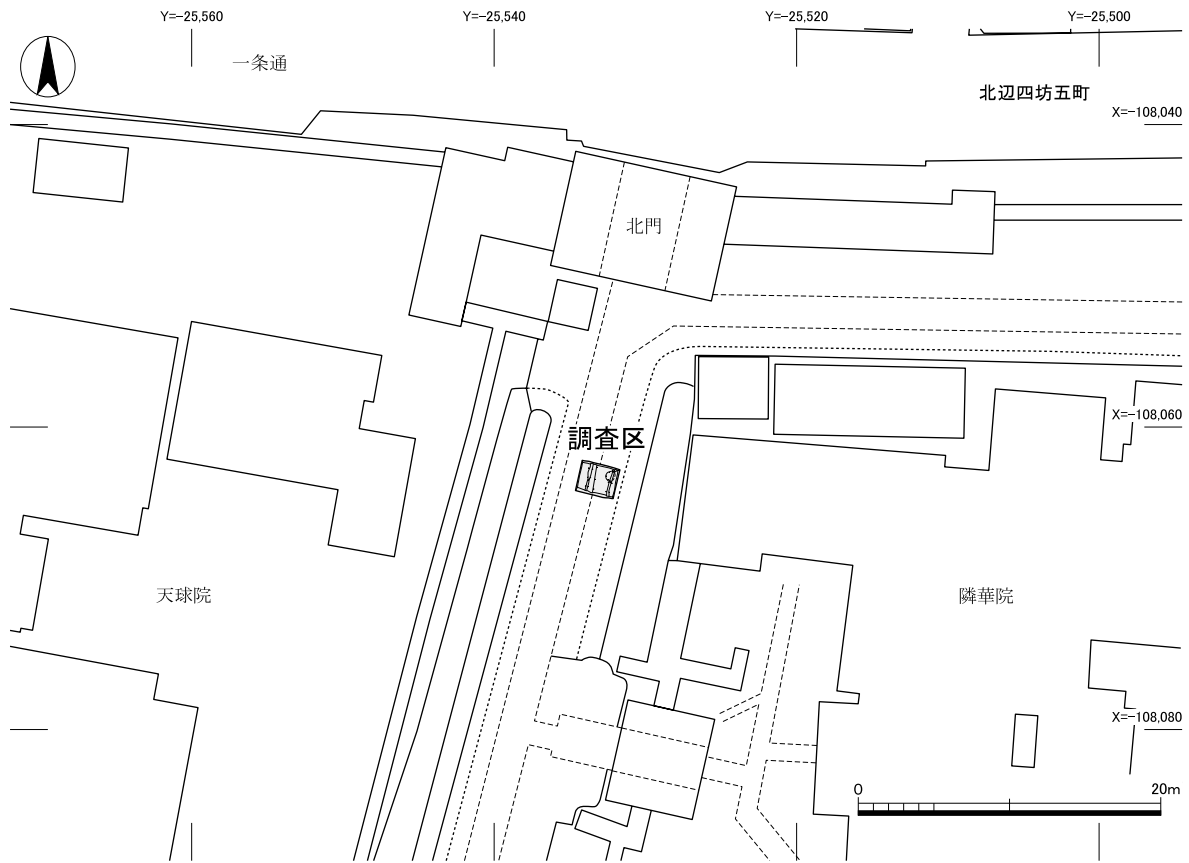


図8 B区調査区配置図(1:500)

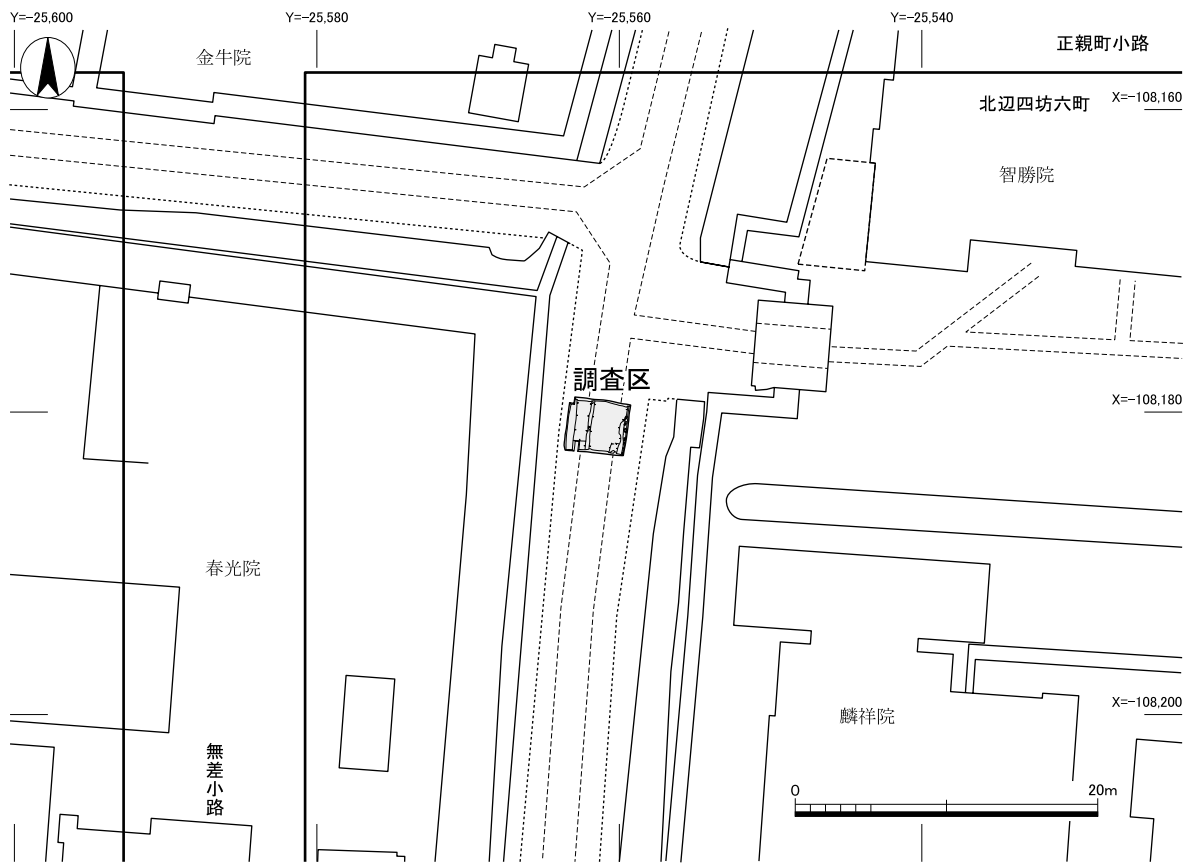


図9 C区調査区配置図(1:500)

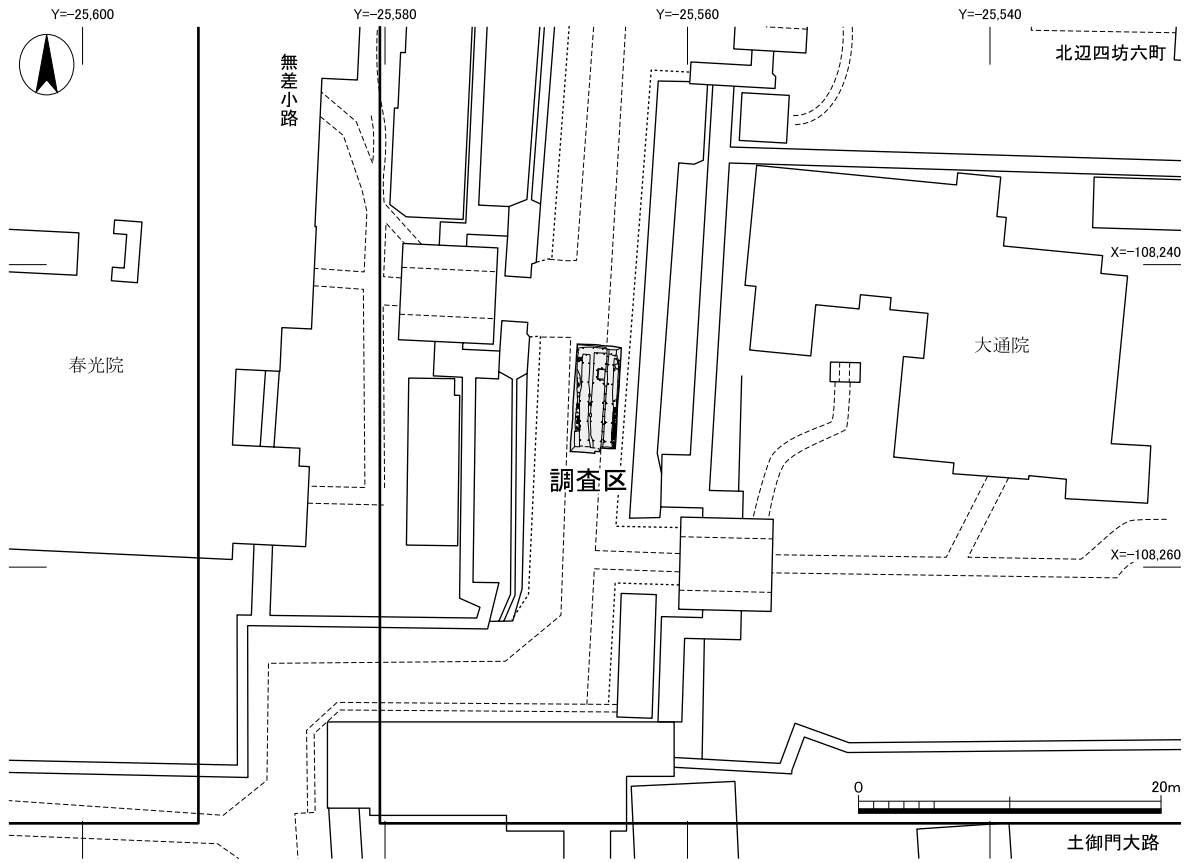


図10 D区調査区配置図 (1 : 500)

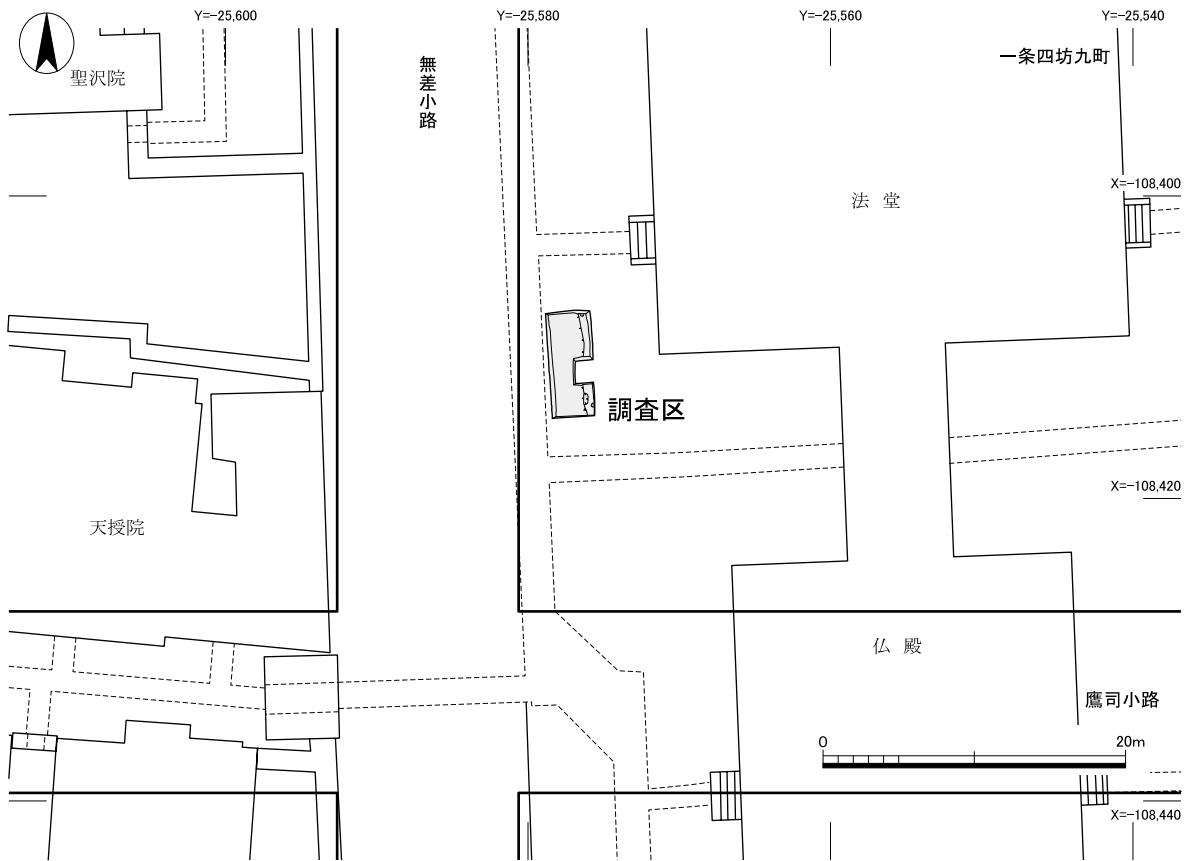


図11 H区調査区配置図 (1 : 500)



図12 J区調査区配置図(1:500)

かったことを示すものであろう。

妙心寺は花園上皇の花園離宮を元とし、建武4年(1337)を開創年次とする¹⁾。応永6年(1399)に寺領が没収されたが、永享4年(1432)には復興された。応仁・文明の乱(1467～1477)で伽藍は焼失するが、文明9年(1477)には寺は再興された。永正6年(1509)には利貞尼が仁和寺の土地を買い求め、妙心寺に寄進、これにより境内は西へ広がった。その後も、安土桃山時代から江戸時代初期にかけて、周辺の土地の買収を行い、江戸時代初期に現在の広さとなった²⁾。現在の七堂伽藍の建立は、南から勅使門は慶長15年(1610)、三門は慶長4年(1599)、仏殿は文政10年(1827)、法堂は明暦2年(1656)、大方丈は承応3年(1654)、小方丈は慶長8年(1603)、大庫裏は承応2年(1653)である³⁾。

ところで、今回の調査区では、H区は参道脇、その他の調査区は参道上に設定されている。諸堂が整備された記念として、万治元年(1658)には境内を描いた絵図が作成され、これが今日まで残る最も古い絵図となるが、この絵図に描かれている石畳参道は現石畳参道とほぼ同じ位置にある。

(3) 周辺の調査(図1)

妙心寺境内では、過去に十数箇所が発掘調査と試掘・立会調査が実施されている。

調査1は1976年11月に金牛院境内地で納骨堂建設に伴い実施された調査である。安土桃山時代と推定される瓢箪形池跡などを検出、金箔瓦が出土している⁵⁾。

調査2は1979年7月から8月に保育園建設に伴い実施された調査で、調査面積は300㎡ある。平

安時代後期の井戸や江戸時代後期の溝などを検出している⁶⁾。

調査3は1979年8月から9月に微妙殿建設に伴い実施された調査である。調査面積は120㎡ある。平安時代の東西溝・土坑・ピット、鎌倉時代から室町時代の土坑・ピット、江戸時代の土坑や溝などを検出している。平安時代の東西溝は土御門大路北側溝に該当する⁷⁾。

調査4は1980年3月から4月に同じく微妙殿建設に伴い実施された調査で、調査面積は318㎡あり、飛鳥時代の土坑、平安時代後期の土坑、室町時代の柱穴と土坑、江戸時代の瓦溜・土坑・溝などを検出している⁸⁾。

調査5は1983年8月から9月と1984年5月の2度に分けて行われた調査で、本堂改築に伴い実施された。調査面積は約500㎡。江戸時代の土坑・溝・井戸・建物跡を検出、土地売券などと照らし合わせて塔頭の変遷を考える材料を得た⁹⁾。

調査6は宅地開発に伴い、1993年5月から8月まで600㎡と、1994年3月から4月までの120㎡の2度に分けて行われた調査である。推定されていた平安京西京極大路や妙心寺塔頭実相院の建物に関連する遺構は検出されなかったが、中世の井戸や濠、江戸時代の井戸や園池・墓地などを検出している¹⁰⁾。

調査7は妙心寺庫裡修復に伴う事前調査で、第1次調査として1993年12月に14㎡、第2次調査として1996年9月から10月に104㎡の2度行われた。第1次調査では、12世紀代に源有仁が開いた「池館」との関わりが考えられる溝を検出した。また、1653年の庫裏建立時に廃絶したとみられる溝を検出、台所に関わる遺物が出土したことから、庫裏創建以前においても、庫裏相当の施設があったことなどがわかった。第2次調査では、12世紀後半に廃絶した溝や瓦溜まり、13世紀後半から14世紀前半の土坑、江戸時代中期から幕末までの瓦溜まりを検出している¹¹⁾。

調査8は2002年11月から翌年1月に涅槃堂再建に伴い実施された調査で、調査面積は330㎡あり、江戸時代前期の溝・柱穴、江戸時代中期から後期の柱穴・土坑などを検出している¹²⁾。

調査9は2012年2月に春光院境内で宿坊建設に伴い実施された試掘調査で、調査面積39㎡。調査区の東端、無差小路の西側溝該当位置で、幅5m、深さ0.15mある南北溝が検出された。溝内から11世紀代の土器が出土した¹³⁾。

調査10は2012年7月から10月にかけて天球院北面築地を、2013年5月に玉鳳院南面築地（南西隅）の修復事業に伴う築地の断割調査を実施している¹⁴⁾。

調査11は2013年7月から12月に貯水槽工事に伴い3箇所で行われた調査で、調査面積は計857㎡ある。宗務本所前駐車場（本所調査区）では、平安時代の池、江戸時代前期の溝、江戸時代末期から明治時代の墓群を検出した。微妙殿北西部での調査（微妙殿調査区）では、土御門大路北側溝に該当する溝や鎌倉時代から室町時代の柱穴・土坑などを検出した。韶陽院跡北端の調査（韶陽院調査区）では、江戸時代中・後期の土取穴を検出、土取場として利用されていたことが判明した¹⁵⁾。

調査12は2013年12月から翌2014年2月に配管工事に伴い13箇所で行った。調査面積は計187㎡である。平安時代の土坑や鎌倉時代から室町時代の土坑・柱穴・溝・整地土層、壁面が熱を受けて赤変した江戸時代の土坑を検出している¹⁶⁾。

調査13は2014年8月から翌2015年1月に配管工事に伴い8箇所で行った。調査面積は計66㎡である。平安時代の無差小路西側溝と考えられる溝や鎌倉時代から室町時代の遺物包含層、江戸時代の整地層を検出した¹⁷⁾。

調査14は2014年9月から翌2015年1月に貯水槽工事に伴い3箇所で行った。調査面積は計235㎡である。江戸時代初期の井戸や江戸時代前期の溝などを検出した。溝は妙心寺北限の土居に伴う内溝あるいは隣華院の外堀である可能性が考えられることから、文化庁により重要遺構と判断され、一部を地中で現状保存することとなった¹⁸⁾。

註)

- 1) 竹貫元勝「妙心寺」『妙心寺 開山無相大師六五〇年遠諱記念』 読売新聞社 2009年
- 2) 平井俊行『近世妙心寺建築の研究』 思文閣出版 2013年
- 3) 『妙心寺大観』 妙心寺派宗務本所 1972年
- 4) 『妙心寺伽藍並に塔頭絵図』 万治元年(1658) 狩野理左衛門作 妙心寺蔵
- 5) 『花大考研報告5 妙心寺境内地の調査－金牛院敷地、花園高等学校敷地－』 妙心寺塔頭金牛院 1985年
- 6) 「平安京右京北辺四坊五町・史跡妙心寺境内1」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 7) 「平安京右京北辺四坊六町・史跡妙心寺境内2」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 8) 「平安京右京北辺四坊六町・史跡妙心寺境内3」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 9) 前掲5)
- 10) 『花大考研報告9 妙心寺旧塔頭実相院跡調査報告』 花園大学 1995年
- 11) 『花大考研報告12 花園大学構内調査報告VI(付 妙心寺庫裡修理に伴う事前調査)』 花園大学 1998年
- 12) 『史跡妙心寺境内・平安京右京一条四坊八町跡』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-16 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 13) 「平安京右京北辺四坊六・七町 史跡妙心寺境内 No.12」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度』 京都市文化市民局 2013年
- 14) 『史跡妙心寺境内 史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業報告書』 宗教法人妙心寺 2014年
- 15) 「調査その1(平成25年度)」『史跡妙心寺境内・平安京跡』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015年
- 16) 「調査その2(平成25年度)」『史跡妙心寺境内・平安京跡』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015年
- 17) 「調査その3(平成26年度)」『史跡妙心寺境内・平安京跡』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015年
- 18) 「調査その4(平成26年度)」『史跡妙心寺境内・平安京跡』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015年

2. 遺 構

(1) 基本層序 (図13)

調査区は5区(北からB区、C区、D区、H区、J区)に分かれており、調査は南のJ区から北へ順に行った。各調査区は石畳参道上または参道脇に設定されている。前述の万治元年(1658)絵図には、ほぼ現代と同じ配置で石畳参道が描かれている。

すべての調査区において、複数の既存埋設管の掘形により大きく攪乱を受けていたが、その隙間で遺構検出、断面観察を行うことができた。各調査区の地表面の標高は、B区60.4m、C区58.0m、D区56.5m、H区51.9m、J区49.0mで、最北のB区と最南のJ区の標高差は11.4mある。

層序は、地表面以下0.3~0.5mまでが現代盛土、その下に中世から近世の整地層が0.2~0.6mの厚さである。さらにその下層は黄褐色系粘質土の地山となる。すべての調査区の地山上面で整地層を検出した。C区では、地山上面で遺構を検出した。D・H・J区では、整地層上面と地山上面で室町時代から江戸時代の遺構を検出した。

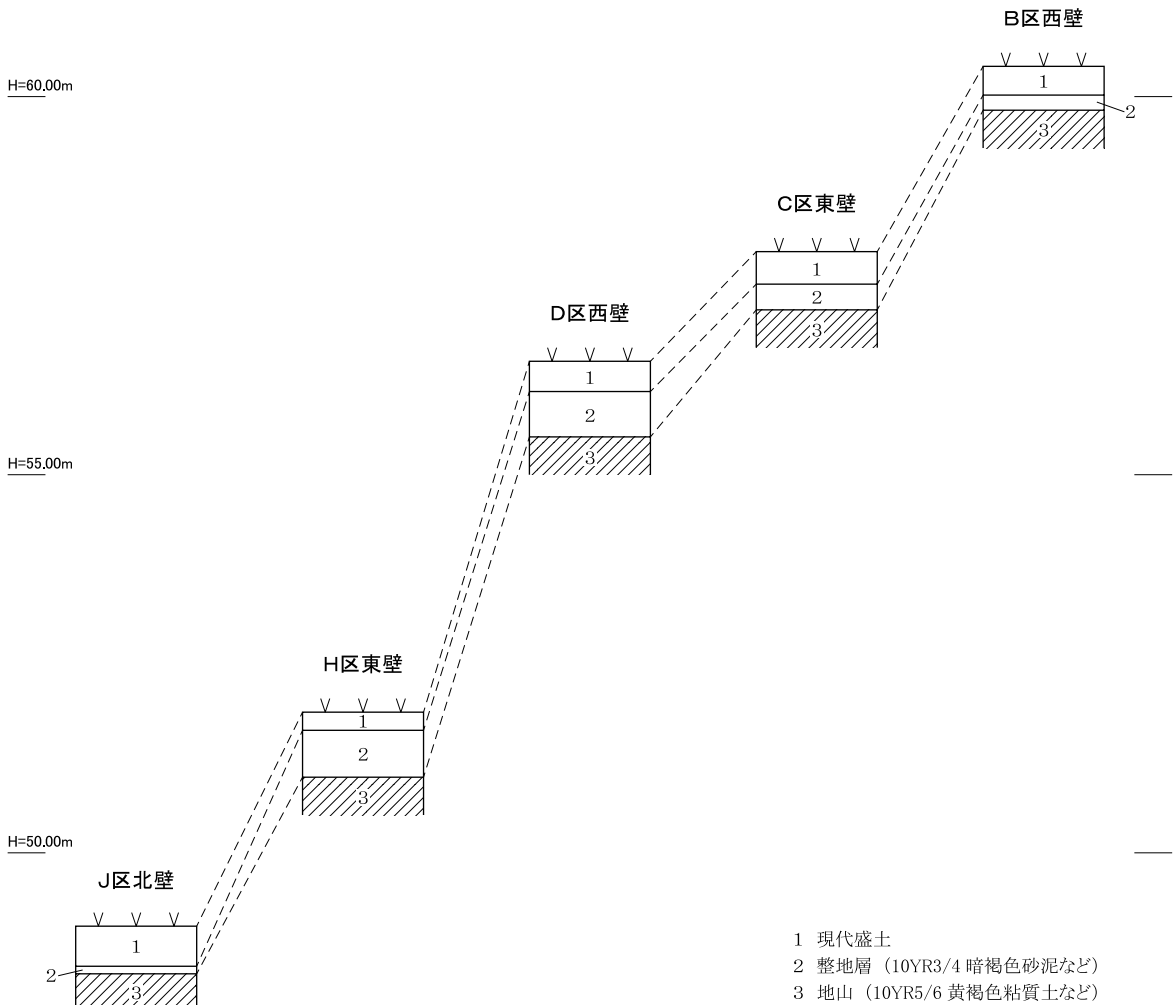


図13 土層模式柱状図

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
室町時代以前	D区：整地層 8	
室町時代	D区：土器溜 7	
江戸時代	H区：瓦溜 1、D区：礫敷 2	
時期不明	B区：整地層、C区：整地層、溝状遺構 1、 D区：整地層、ピット 3～5・9・10・14～17、土坑 1・6、 H区：整地層、ピット 2・3、J区：整地層、土坑 1・2、溝 3	

地山上面の標高は、B区59.8m、C区57.2m、D区55.9m、H区51.0m、J区48.4mである。

以下、調査区ごとに主な遺構について述べる。

(2) B区の遺構 (図14、図版1)

北門から南へ入ってすぐの参道で、隣華院の北西に位置する (図8)。平安京跡では右京北辺四坊五町に相当する。現行の石畳上から東側垣根までにかけて、南北2.1m、東西2.6mの規模で調査区を設定した。埋設管による攪乱が調査区内に東部・西部に南北方向に延長する。調査区内のほとんどが攪乱を受けていたが、中央部で南北に細長く整地層を検出した。

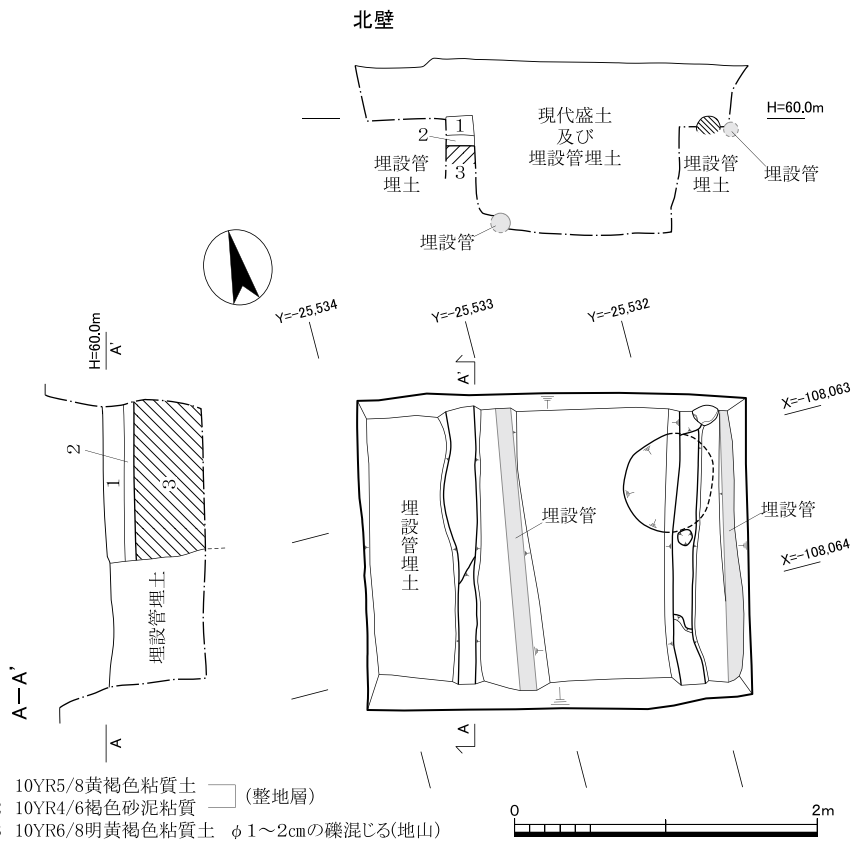


図14 B区実測図 (1 : 50)

基本層序

北壁での層序は、現地地表下0.38mまで現代の参道整地層、以下は時期不明の整地層が厚さ0.2m堆積し、明黄褐色粘質土の地山となる。

遺構

整地層 中央部埋設管の間隙で、整地層（図14の1・2層）を検出した。上面の標高は60.02mである。上層は黄褐色の粘質土、下層は粘質の褐色砂泥であった。遺物の出土はなく、時期は不明である。

(3) C区の遺構（図15、図版1）

智勝院南西の参道に位置する（図9）。平安京跡では右京北辺四坊六町に相当する。現行の石畳上から東側垣根までにかけて、南北3.5m、東西4.0mの規模で調査区を設定した。この調査区でも

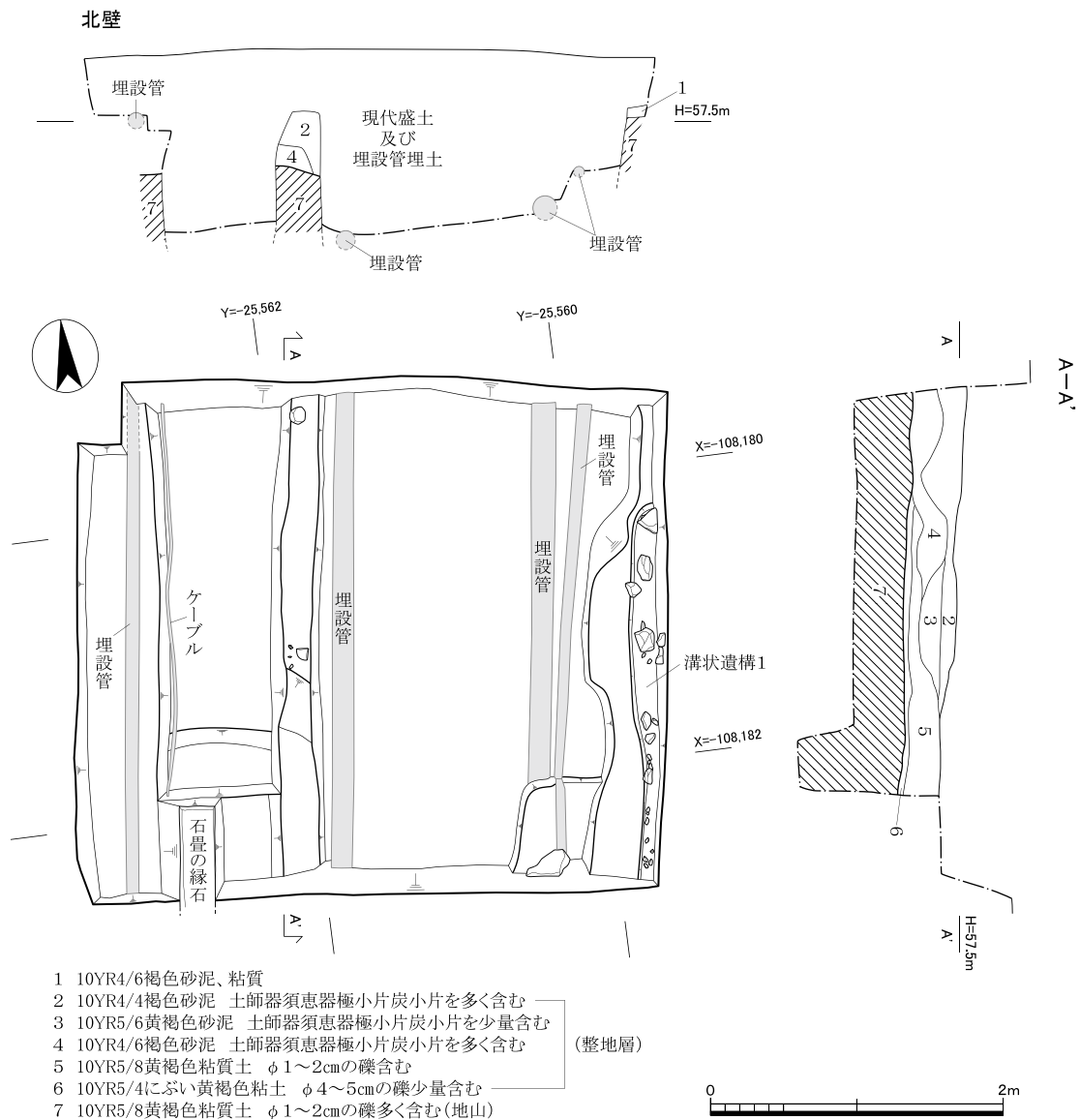


図15 C区実測図（1：50）

南北に走る複数の埋設管およびケーブルにより深く攪乱を受けていたが、東端部・中央部西寄り
で南北に細長く遺構が残存していた。なお、C区では交通規制の都合上、反転調査となった。

基本層序

現地表下0.5mまで現代の参道整地層、以下は時期不明の整地層が厚さ0.4m堆積し、黄褐色粘質
土の地山となる。

遺構

整地層 中央部埋設管の間隙で、整地層（図15の2～6層）を検出した。整地層は厚さ0.4mあ
る。上面の標高は57.56mである。整地層には、土師器・須恵器・炭の極小片を含むが、時期を判
定できるものはなかった。整地層最下層（6層）は、にぶい黄褐色粘土で、厚さは5cmである。

溝状遺構 東端部では地山上面で深さ0.03cmの時期不明の溝状遺構（溝状遺構1）を検出した。
溝状遺構1には径2～3cmの礫が混じる。路面の低い部分を埋めたものの可能性がある。東端部で
の地山上面の標高は57.53mである。

（4）D区の遺構（図16、図版2）

大通院西側の参道に位置する（図10）。平安京跡では右京北辺四坊六町に相当する。現行の石畳
上から東側垣根までにかけて、南北7.1m、東西3.0mの規模で調査区を設定した。北端で東西の埋
設管、中央部で南北に走る複数の埋設管およびケーブルにより深く攪乱を受けていたが、東端部、
西端部、中央部で南北に細長く遺構が残存していた。

基本層序

西壁での層序は、現地表下0.35～0.4mまで現代の参道整地層、0.6mまで明黄褐色から褐色系の
整地層、さらに0.95mまで暗灰黄色から暗褐色の整地層があり、その整地層を切り込んで土坑や土
器溜りなどの遺構がある。以下は黄褐色系粘質土の地山となる。中央部では地山を切り込んでピッ
トがある。

遺構

整地層 西壁で整地層（図16の1～4層）を検出した。厚さは0.25～0.35m、上面の標高は56.18
mである。遺物の出土はなく、時期は不明である。石畳の基礎とみられる。下層でも整地層（整地
層8、図16の19～21層）を検出した。厚さは0.3～0.35m、上面の標高は55.86mである。土師器
の極小片を含むが、時期を判定できるものはなかった。

礫敷き 南東部で礫敷面（礫敷2）を検出した。径3～5cmの礫を固く敲き締めており、路面と
なっていたと考えられる。前述の万治元年（1658）絵図にみられる参道の可能性が高い。上面の標
高は56.1mである。

ピット 東端部でピット9・14・15、中央部でピット3・4・10、西端部でピット5・16・17
を検出した。すべて地山上面で検出しているが、地山上面の標高は、東端部で55.95m、中央部で
55.56m、西端部で55.5mと若干の標高差がある。時期を判定できる遺物の出土はなかったが、ピッ
ト3からは灰釉陶器碗（13～14世紀の山茶碗）の底部が出土、ピット4には平坦な面を上にして

- | | | |
|----------------------------------|--------|---|
| 1 7.5YR5/8 明褐色砂泥、粘質、固く締まる | (整地層) | 12 10YR4/4 褐色砂礫、固く締まる、φ1~1.5cm礫混じる(礫敷2) |
| 2 10YR4/4 褐色土、固く締まる | | 13 10YR3/3 暗褐色砂泥、粘質 |
| 3 10YR5/8 黄褐色砂礫、固く締まる、φ1~2cm礫混じる | | 14 10YR4/4 褐色砂泥、粘質 (ピット11) |
| 4 10YR6/8 明黄褐色粘質土、固く締まる | (土坑1) | 15 10YR4/6 褐色砂泥、粘質 |
| 5 2.5Y5/6 黄褐色砂泥、φ2~3cm礫混じる | | 16 7.5YR4/4 褐色砂泥(ピット14) |
| 6 2.5Y5/6 黄褐色砂泥 | (土坑6) | 17 10YR4/4 褐色砂泥、土師器小片多量に含む (土器溜7) |
| 7 10YR3/4 暗褐色砂泥、瓦混じる | | 18 10YR3/4 暗褐色砂泥 |
| 8 7.5YR5/8 明褐色粘質土 | (整地層8) | 19 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土 |
| 9 10YR4/6 褐色シルト(ピット5) | | 20 10YR3/3 暗褐色砂泥、上層に炭・土師小片混じる |
| 10 10YR4/6 褐色粘質土、人頭大の礫混じる | | 21 10YR3/3 暗褐色砂泥、締まる |
| 11 10YR5/6 黄褐色シルト | (地山) | 22 10YR6/8 明黄褐色粘質土 |
| | | 23 10YR5/6 黄褐色粘質土 |

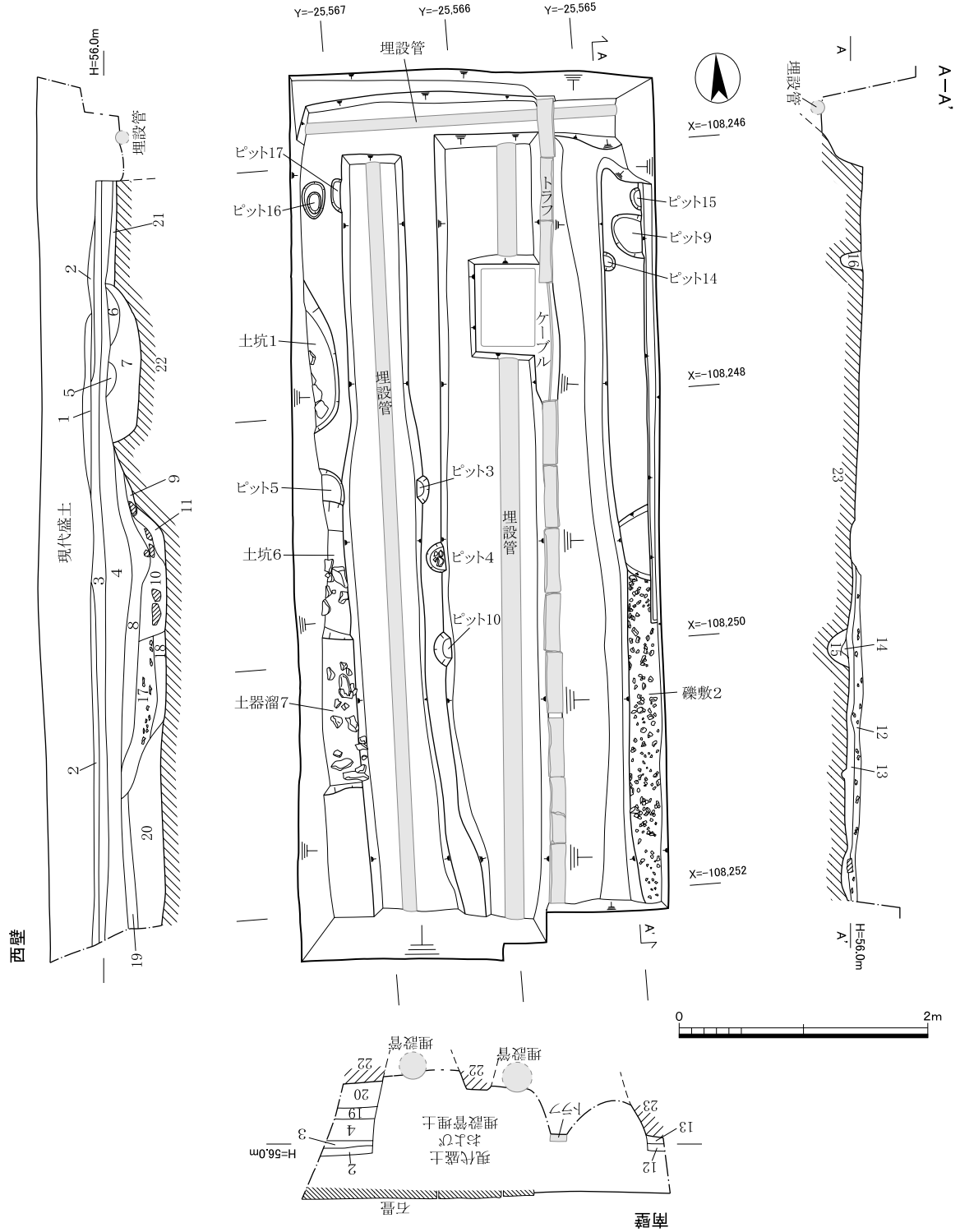


図16 D区実測図 (1:50)

礫が配されていた。

土坑 西端部、石畳基礎の下層で時期不明の土坑1・6を検出した。検出面での規模は土坑1が南北1.2m、深さ0.28m、土坑6が南北1.1m、深さ0.2mである。

土器溜り 南西部で土器溜り7を検出した。土坑6により攪乱を受けるが、検出面での規模は南北1.2m、深さ0.28mである。土師器皿の小片が多量に詰まる。土師器皿は白色系と褐色系のものが混ざり、時期は室町時代初期の様相を示す。鉄釘も出土した。

(5) H区の遺構 (図17、図版3)

法堂南西部、参道の東脇に位置する (図11)。平安京跡では右京一条四坊九町に相当する。現行の石畳東端から、南北7.0m、東西3.0mの規模で調査区を設定したが、東側中央部には松の木があり根回り養生のため、周囲を東西1.2m、南北1.4m残した。中央部および西半部はすべて南北に走る埋設管およびケーブルにより深く攪乱を受けていたが、東端部で遺構が残存していた。なお、無差小路内溝に関する遺構はみつからなかった。

基本層序

東壁での層序は、現地表下0.2~0.45mまで現代盛土層、その直下で0.14mの厚さで瓦溜り層、その下層0.9mまで黄褐色から褐色系砂泥の整地層があり、以下は明褐色系粘質の地山となる。

遺構

瓦溜り 東端部で、深さ0.25mで鎌倉時代から江戸時代中期の瓦を含む瓦溜り層 (瓦溜り1、図17の2層) を検出した。幾度か行われた法堂修復に関わる遺構とみられる。

整地層 瓦溜り1の下層は時期不明の整地層 (図17の5・6・8~10層) があつた。地山直上の整地層 (10層) は厚さ10~15cmで固く締まる。その上層には礫を多量に含む層 (8層) が厚さ5~6cmあつた。路面であつた可能性がある。

ピット 東壁断面で整地層を切り込んでピット2 (図17の7層) を検出した。また北端で地山を切り込んでピット3 (図17の11層) を検出した。いずれも出土遺物がなく、時期は不明である。

(6) J区の遺構 (図18、図版3)

南門から北へ入ってすぐの参道で、放生池の南東に位置する (図12)。平安京跡では右京一条四坊十町に相当する。現在の石畳上から東側垣根までにかけて、南北3.2m、東西3.2mの規模で調査区を設定した。中央部および東半部はすべて南北に走る複数の埋設管により深く攪乱を受けていたが、東端部で遺構が残存していた。なお、近衛大路内溝に関する遺構はみつからなかった。

基本層序

北壁での層序は、現地表下0.5mまで現代の参道整地層、その下層に暗褐色砂泥の整地層がある。西端で南北溝があるが、その溝の埋土を切り込んで土坑が2基あつた。以下は粘質の明褐色砂泥の地山となる。

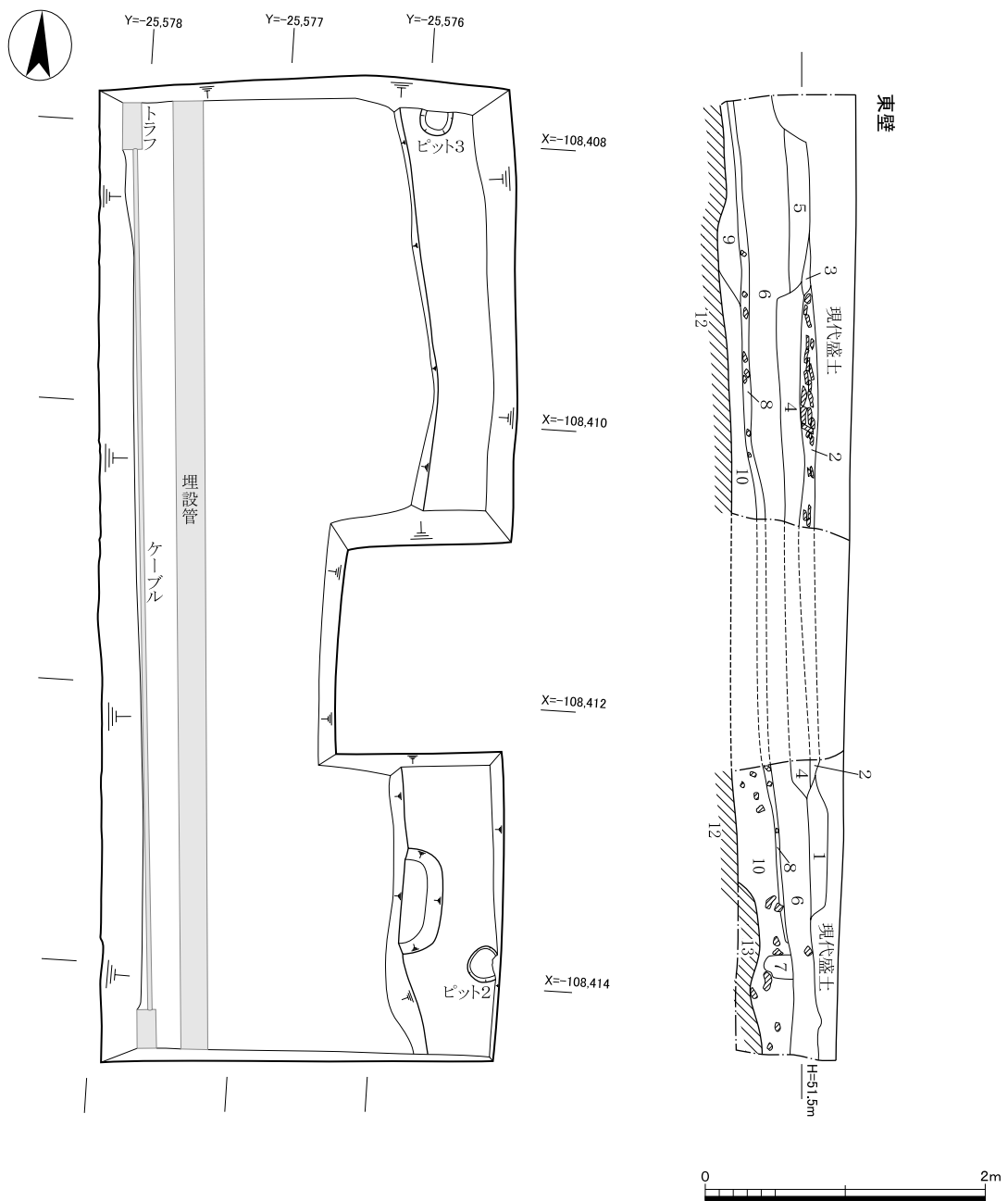
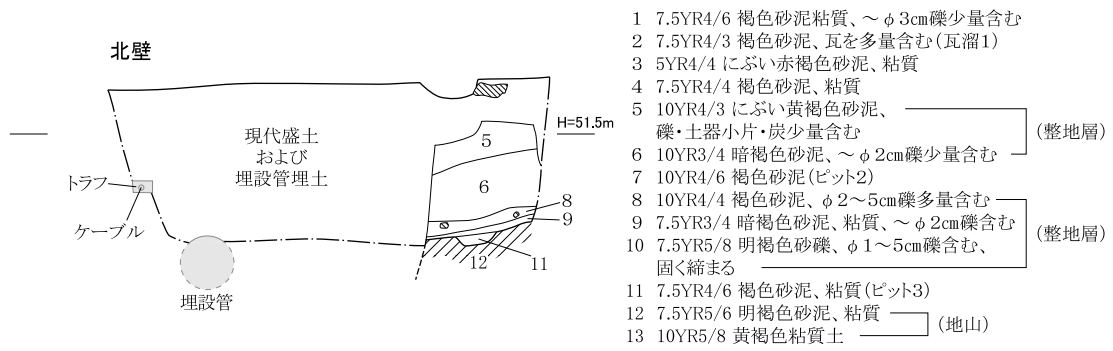


図17 H区実測図 (1 : 50)

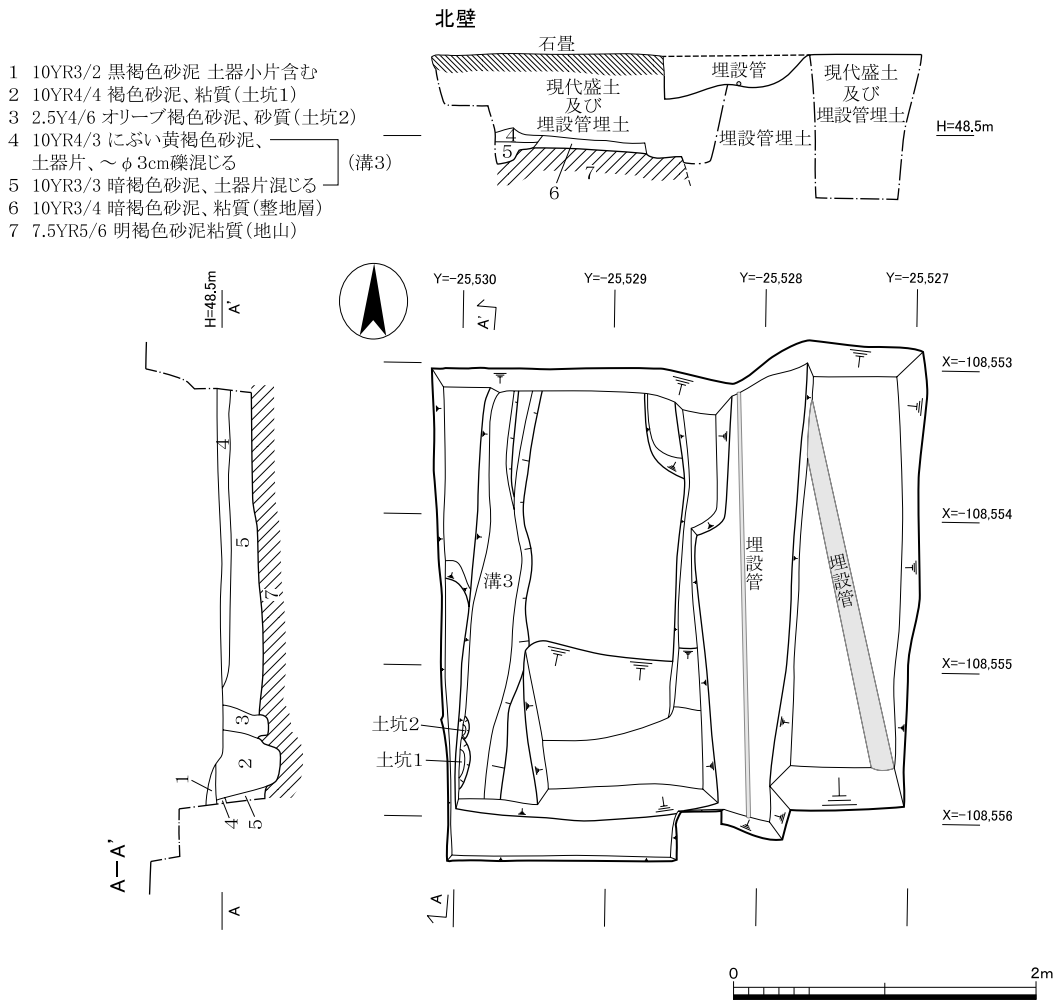


図18 J区実測図(1:50)

遺構

整地層 北西部で厚さ0.08mの整地層(図19の6層)を検出した。上面の標高は48.5mである。遺物の出土はなく、時期は不明である。

土坑 南西隅部で溝3埋土を切り込んで2基の土坑(土坑1・2)を検出した。検出面積が限られているため、規模は不明であるが、断面での深さは土坑1が0.4m、土坑2が0.3mある。出土する遺物がなかったため、時期は不明である。

溝 西端部、整地層上面で南北溝を1条(溝3)検出した。埋土は2層に分けることができる。下層の暗褐色砂泥層から平安時代末期から鎌倉時代にかけての高杯脚部小片が出土した。混入の可能性もあり、同時代の遺構であると断定しがたい。

3. 遺 物

(1) 遺物の概要 (表2)

調査では、整理コンテナにして4箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器類、瓦類、金属製品などがある。全体の約7割を土器類が占める。遺物の帰属時期は、鎌倉時代から室町時代のものと江戸時代のものがある。江戸時代の遺物が最も多く室町時代の遺物がそれに次ぐ。

土器類には、鎌倉時代の土師器小型高杯、須恵器甕、灰釉陶器椀、室町時代の土師器皿・杯・甕、焼締陶器甕、瓦器椀・鍋・羽釜・火鉢、輸入青磁椀、江戸時代の土師器皿、焼締陶器甕がある。

瓦類には、江戸時代の軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。

D区土器溜7からまとまった土器が出土したほかは、少量かつ小片であったため、図示できる遺物は以下のD区土器溜7出土の土師器6点とH区瓦溜1出土の軒平瓦の2点に留まる。

なお、土器編年は小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」に準拠した¹⁾。

(2) 土器類 (図19・20)

D区土器溜7出土土器 出土した遺物には、土師器皿・杯の破片が多量にあるものの、接合する破片はほとんどない。土師器は、褐色系のものと、いわゆるへそ皿を含む薄手の白色系のものの2群に分かれる。京都Ⅶ期新段階に属する。図示した土師器はすべて灰白色で、口縁は1段ナデである。1は皿Sで、口径7.9cm、器高2.9cm、器壁がやや肥厚する。2～4は皿Sで、口径10.8～11.8cm、器高2.4～3.0cmに収まる。器壁は薄手である。体部は外傾気味で口縁端部が上方に立ち上がる。5・6は皿Shで底部に丸味を持つ、いわゆるへそ皿である。5は口径6.4cm、器高1.6cm、体部は外傾し、口縁端部は上方に立ち上がる。6は底部のみ残存する。

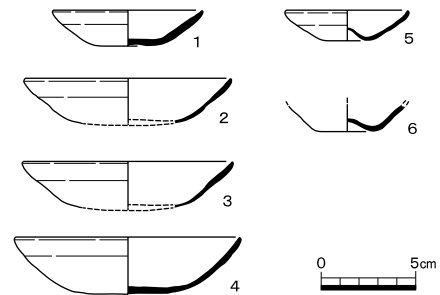


図19 D区土器溜7出土土器実測図 (1:4)

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク未掲載箱数	B・Cランク箱数
平安時代末期～鎌倉時代	土師器、須恵器、灰釉陶器				
室町時代	土師器、焼締陶器、瓦器、輸入青磁、鉄釘		土師器6点		
江戸時代	土師器、焼締陶器、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鉄釘、鉄滓		軒平瓦2点		
合計		4箱	8点(1箱)	3箱	0箱

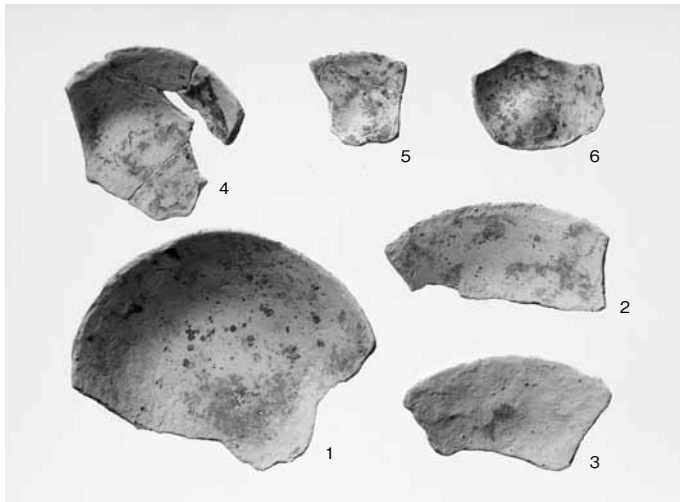


図20 D区土器溜7出土土器

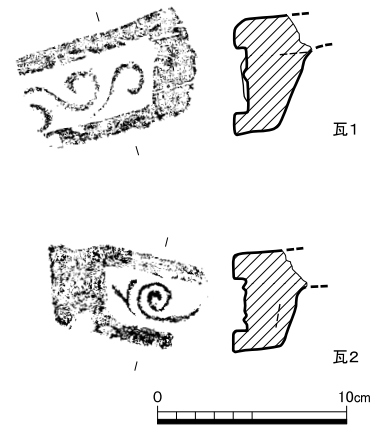


図21 H区瓦溜1出土軒平瓦拓影及び実測図（1：4）

（3）瓦類（図21・22）

H区瓦溜1出土瓦 出土した瓦には、軒平瓦・丸瓦・平瓦などの小片がある。ほとんどが丸瓦と平瓦の破片であったが、軒平瓦には以下の2点があった。

瓦1は唐草文軒平瓦で、唐草の先端は丸く巻き込む。文様はシャープで、灰色を呈し、焼成は良好、堅緻である。胎土は密で径3.0mm以下の長石・チャートを含む。顎貼り付けにより製作されている。

瓦2は唐草文軒平瓦で、唐草の先端が二股に分かれる。唐草は強く巻き込む。暗灰色を呈し、焼成はやや不良、胎土は密で径5.0mm以下の長石・チャートを含む。顎貼り付けにより製作されている。



図22 H区瓦溜1出土軒平瓦

（4）その他の遺物

その他の遺物として、鉄滓・鉄釘がある。極小片のため、図示はできなかったが、鉄滓はH区瓦溜1からの出土、鉄釘はD区土器溜7からの出土である。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第3号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080~90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580~90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃	
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV	
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

4. ま と め

今回の調査では、妙心寺境内の石畳参道上または石畳参道脇に小規模な調査区を5箇所設定した。各調査区は複数の既存埋設管およびケーブルにより深く攪乱を受けていたにもかかわらず、各調査区の東端部・西端部や各既存管の掘形間で遺構を検出することができた。遺構は室町時代から江戸時代までのものがあった。なお、平安時代の遺構は見つかっていないため、平安京に関するデータを得ることはできなかった。

すべての調査区で黄褐色系粘質土の地山面を検出、その上部には褐色系砂礫の整地層を検出することができた。C区では地山上面で、D・H・J区では整地層上面と地山上面でピットや土坑・溝などを検出したが、遺構から出土する遺物が極小片かつ少量であったため、時期は判定し難い。

D区では、室町時代の土器溜を検出した。土器溜7から出土する土器は土器編年では京都Ⅶ期中段階から新段階に属する。これは室町時代初期ごろであり、建武2年(1335)に花園上皇が出家して法皇となり、花園御所を禅寺に改めた時期と重なる。ただし、花園御所は今の妙心寺玉鳳院あたりと推定されており、北東に120m以上離れている。

同じくD区では、地山面直上に小礫を固く敲き締めた礫敷面(礫敷2)を検出した。現代の石畳参道脇に位置する。また、万治元年(1658)絵図にも、この地点に参道が描かれることから、江戸時代前期に寺域を整えた頃の参道路面と考えられる。

H区では江戸時代前期の瓦溜りを検出した。H区は現在の法堂の南西に位置する。現法堂は明暦2年(1656)末にほぼ完成している。瓦溜りは、法堂造営後に幾度か行われた修復の際に瓦をまとめて廃棄した土坑である可能性がある。また、鉄滓が含まれることから周辺で簡単な鍛冶工が行われたことも想定できる。平成25年度に行った調査(図12の調査12-3区)では、仏殿の東側で熱を受け赤変した土坑を検出、鉄滓の細片が出土している。

今回の調査地では、現代に攪乱を受けながらも、その隙間に残存していた遺構を検出することができた。面積は小さくとも、周辺の調査との関連を合わせていくことができ、妙心寺創建期から江戸時代に寺域を整え、現在に至るまでの変遷を考えていく上で、重要な成果を得ることができた。

圖 版



1 B区全景（北から）



2 C区東半全景（北から）



3 C区西半全景（北から）



1 D区全景（北から）



2 D区礫敷2（北から）



3 D区土器溜7（北から）



1 H区全景（北から）



2 H区南東部（南から）



3 J区全景（北から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきみょうしんじけいだい・へいあんきょうあと							
書名	史跡妙心寺境内・平安京跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2016-14							
編著者名	モンペティ恭代							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2017年5月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせきみょうしんじけいだい 史跡妙心寺境内 へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 たにぐちそのまち ～ はなぞの 谷口園町～花園 てらのまえちよう ちない 寺ノ前町 地内	26100	1	35度 01分 26秒 (D区)	135度 43分 11秒 (D区)	2016年9月 5日～2016 年12月16日	70m ²	配水管 布設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡妙心寺境内 平安京跡	史跡 都城跡	室町時代 江戸時代	土器溜り 瓦溜り、礫敷き	土師器、焼締陶器、瓦器、輸入青磁 土師器、焼締陶器、瓦、鉄滓		中世の妙心寺創建期に関わる土器溜りを検出した。 江戸時代初期の参道路面を検出した。 江戸時代の法堂修理に関わる瓦溜りを検出した。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-14

史跡妙心寺境内・平安京跡

発行日 2017年5月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961